

大陸向輸出依存型経済の悲哀

公益財団法人交流協会専務理事 井上 孝

2月23日に台湾行政院主計總處から2012年の国民所得統計実績見込みが公表されましたが、いかにも台湾的な数字が出ておりましたので紹介してみたいと思います。

2012年台湾の実質GDP成長率は1.26%で、前年の4.07%、前々年の10.76%に較べて著しい低成長に止まりました。原因ははっきりしていません。輸出の伸びが止まり、これに伴い民間設備投資も減少したからです。

ちょっとびっくりするのは、これを需要項目別寄与度で見ていったときです。成長率1.26%に対して、民間固定資本形成の寄与度は▲0.29%ポイント、民間消費は0.80%ポイントで、国内需要計としては0.11%ポイントとなっています。他方、輸出の寄与度は0.09%ポイントに止まっていますから、国内需要と輸出を合計しても0.2%ポイントにすぎません。低成長であったとはいえ1.26%はあったわけですから、1.06%ポイント分の需要要因がなければなりません。しかし他に正の需要項目はありません。結局、負の需要項目である輸入が減少したことにより、1.26%成長を支えたのです。確かに、2012年の輸入減の成長寄与度は1.05%ポイントと計算されています。

国民所得論では輸入を「需要の漏れ」という言い方をしますから、需要の漏れが減ったことによる成長にすぎないのです。

実は、台湾経済においては、低成長のときにはいつもこのような現象が起こっています。2012年以前で2%以下の低成長になった年は、2008年の0.73%と2009年の▲1.81%の2例あります。いずれの年も輸出が0.61%ポイントと横這いあるいは▲6.11%ポイントと減少し、民間設備投資の大幅減少▲2.61%ポイント、▲2.07%ポイン

トを引き起こし、2008年のように正の需要項目の大幅減少▲1.5%ポイントを負の需要項目である輸入の減少分2.23%ポイントが吸収して低いながらも成長を実現したか、あるいは、2009年のように正の需要項目の落ち込み▲9.35%ポイントがあまりに大きすぎて輸入の大幅減少分7.53%ポイントでは吸収しきれずに大幅なマイナス成長となった例です。

台湾のGDPに占める輸出需要の割合は2012年で73.66%にもなります。民間消費の60.30%を大幅に上回る最大項目です。さらに、台湾の輸出産業は、日本等からの資本財及び中間財の輸入に支えられています。すなわち、台湾経済において、輸出は、それ自体最大の需要項目であるだけでなく、設備投資を左右することにより更に需要変動幅を拡大させ、その上、輸入さえも変動させることにより、台湾経済を決定するのです。

台湾輸出の実に約4割は大陸向けです。

したがって、大陸経済の動向が、輸出を左右し、設備投資を増減させ、輸入までも変動させることにより、台湾経済を動かしているのです。

大陸経済に詳しい識者の間からは、急速にピークアウトしつつある人口動態、生産性向上の限界、4兆元投資の反動などの問題を指摘し、「中国台頭の終焉」(津上俊哉)とさえも言われ始めている現在、大陸一辺倒になっている台湾経済構造の変革は、急務であると思わざるをえません。台湾政府からも改善への動きが出ているのは高く評価すべきでしょう。

なお、申しあげるまでもありませんが、以上はすべて筆者の私見です。